2022年（令和4年）6月2日（木曜日）
北海道新聞
第3種郵便物認可

次の50年へ思い新た

セレモニーに市民ら400人

1日に行われた旭川市中心部の目抜き通り「旭川平和通買物公園」の50周年セレモニーには、市民ら約400人が集まり「旭川の顔」の節目を祝った。開設当時は日本初の恒久的歩行者専用道路として全国から注目された。しかし近年は郊外への大型店出店などにより通行量が減少し、複数の大型商業施設の閉店も決まっている。それでも市民からは「廃れたと言われるのは悔しい」と、これからの買物公園に期待を寄せる声が聞かれた。（大井咲乃、菅沢由佳子、山口真理絵）

老舗閉店の一方 進む再開発

「旭川の顔」魅力なお

買物公園50年



セレモニーでは、市立中央中の吹奏楽部の演奏に多くの市民が耳を傾けた（諸橋弘平撮影）

セレモニーは買物公園のアッシュビル前で行われ、特設ステージの周囲に人だかりもできた。来賓の今津寛介市長は、電動キックボードに乗って登場。市は、市民の中心市街地での移動を楽にするため電動キックボードの導入を検討しており、今津市長は「今の時代に合う買物公園のあり方を市民の皆さんと考えたい」とあいさつした。

終盤には、買物公園に近い市立中央中の吹奏楽部のミニコンサートも開かれ、人気バンド・サカナクションの代表曲「新宝島」など3曲を披露。通りかかった人も足を止め、演奏に聞き入っていた。

買物公園は1972年6月1日に開業。沿道に映画館や商店が軒を連ね、開業7年後の79年の1日の通行量は約36万人に上った。しかし、自家用車の普及やインターネット通販の広がりの影響などで、昨年の通行量は約6万1千人まで減少した。

さらに今秋に老舗商業ビル「マルカツデパート」が閉店予定で、ファッションビル「オクノ」は2025年にも閉館する見通し。買物公園を核とした市中心部の衰退が懸念される。セレモニーに訪れた市内の阿曽宏子さん(81)は「今の旭川は百貨店がなく、マルカツも無くなるのが悲しい。買い物できる場所が少なく、同年代の友人も札幌に買いに行くようだ」と話す。

一方で、西武旭川店などの商業施設跡地では再開発が進み、7月には新たな商業施設「旭川はれて」の開業も予定される。市内の主婦長嶺安奈さん(33)は夫の転勤で昨秋、神奈川県から引っ越してきたといい、「買物公園にはおいしい飲食店や行ってみたい店がたくさん。ほぼ毎日来ている」と魅力を語る。



電動キックボードに乗って登場した今津市長

街の姿は変わっても、買物公園は「旭川の顔」だ。旭川市の自営業佐藤雄太さん(37)は「幼いころ『街に行く』と言えば買物公園で、家族との思い出がつまっている。街のため、自分ができることがあれば役に立ちたい」と力を込めた。

魅力的な風景や食 共有を

フォトコン作品募集 インスタで開始

旭川平和通買物公園の50周年を記念し、「平和通買物公園フォトコンテスト」の募集が1日から始まった。買物公園の今や昔の風景、周辺店舗のグルメなどの写真を9月30日までに、写真共有アプリ「インスタグラム」に投稿してもらう。

平和通買物公園50周年記念事業実行委員会の主催。応募の際は、インスタグラムの「買物公園 北海道旭川市」のアカウント（@kaimonokouen）」をフォローし、ハッシュタグ「#買物公園フォトコン2022」をつけ、写真のエピソードなどを添えて投稿する。枚数制限は設けていない。

最優秀賞や入選など計9点を選び、商品券や記念品を贈呈。実行委の小松一恵さん(44)は「魅力的と感じた風景を多くの人と共有してほしい」と応募を呼びかける。問い合わせはライナーネットワーク☎0166・23・2006まで。（菅沢由佳子）



平和通買物公園フォトコンテストをPRするポスター